寺報
善巧（センケウ）

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善巧寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

寺（ごよみ）

四月

一日　お講・下村
一〇日　うらやま日曜学校終了式
一六日　お講・栗虫
二二日　ようこそ日帰りバス旅行

お寺の楽しいバス旅行ーことしは四月二十二日に、日帰りで飛騨の高山へ出かけます。途中、赤尾の道宗のお寺にお参りし、飛越五橋を通り、御母衣ダムそして高山のおいしい料理に舌つづみ…というコース。費用は一万円。定員四十名。おさそい合わせの上、いそいでお申し込み下さい。

二九日　慶びの春　名物・チューリップの花飾りにかこまれておしゃか様、しんらん様、そしてあなたや、お子様のお誕生をお祝いしましょう。当日、赤ちゃんの初参式があり、境内では宇奈月夢を語る会のご奉仕で、たのしい縁日が催されます。

四月二十九日午前十時
慶びの春
花まつり　初参式　縁日

春らんまん――今年も4月29日お寺の境内は花いっぱいに

あれから一年…

四月の声を聞くと心も浮き立って参ります。善巧寺本堂正面、門を入って直ぐ右手に、小さな標柱が立っています。明教院碑の真向うです。「大谷光真御門主　御手植　ヒノキ」と書かれています。

去年四月二十九日、親鸞聖人御誕生八百年記念慶讃法要に御迎えした御門主の鍬を手になさった御姿が、今でも頭に浮びます。あれから一年、ヒノキは枝折れもなく、二メートル余りの背丈に春を待ち受ける若々しい意気込みを感じさせています。

試みに、その葉を一枚、手にして嗅いで見ると、ヒノキ特有の奥床しい匂いが漂って参ります。

此処一年、御門徒衆の間に、去年の大法要の思い出話が、口々にあれこれと語り合われて来ました。

数々の出逢いがあり、様々な悦びがあり、色々な思いがあったと思います。

此の思い出が、消え去ることなく、有難い思い出として何時まで語りつがれて行くことが、浄土真宗の法灯を守り抜く原動力ではないのでしょうか。

此の二月、勧学宮崎圓遵師がお亡くなりになりました。宮崎先生と言えば、四月の法要に、御法話を賜わった方であり、四月二十八日の門信徒大会に助言者としてはげましの御ことばを頂いた方です。御記憶の方もいらっしゃるでしょう。先生の御姿に接することは出来なくなりましたが、そのお言葉は何時までも、耳の底に留まって、子へ孫へと語りつがれて行かねばなりません。

「つまりわれわれは、自分のゆく先をはっきりさせないといけない。ゆく先が決まらなければ真っ暗であります。で、それはどうすればよいかといえば〝六字のいわれ〟を聞くことにつきるわけでありますから、どうぞ聞法に力を注いでいただきたい」

あの時、善巧寺本堂で先生のお話して下さった法話の一節をこうして書きうつしている私の脳裡にも、満堂の聴聞衆のうなずきが目に見えるように浮び上がるのです。

昨年、大法要が営まれた本堂で、今年も、同じ四月に、初参りの法要が営まれます。今年は、又、新しい趣向の、チューリップの花飾りが見られることでしょう。

善巧寺恒例の春のフェスティバルに、全門徒の御参集を期待致します。

住職　雪山　俊之

再録・明教院僧鎔を語る夕べ（上）

空と華と

明教院僧鎔伝

昭和五十七年十一月四日夜

勤行
十四行偈　本典総序
調声　利井明弘師

司　会　ようこそお参り下さいました。今宵はこの寺の第十一世、明教院釋僧鎔慶叟の二百回のお逮夜であります。正当なるご命日を明日にひかえて、その夜をこうして皆様とご一緒に過ごせることになりまして、うれしいかぎりです。では最初に住職からひとこと―

住　職　時あたかも逮夜の晩、で、もう一つ、場所でございますが、ここにいまから二百年前に明教院様がおいでになるとともにそのお弟子様方が日本中からお集まりになった。そしてもう一つ、人でございます。ここにおいでになる先生方は、その後二百年、連綿として、明教院の教えをついでおいでになる方々であります。

時も、場所も、人も、こうやって一緒にさせていただくということは、本当にめったにないことであります。

今日の日はそういう意味のある日でありますので、みなさまともども、明教院をしのびながら、このご縁をよろこびたいと思います。

司　会　それではまず先生方のお話をうかがいます前に、今夜の特別ゲストをご紹介します。上新川水橋の市江村の渡辺俊夫さんであります。二百六十年前、明教院がうぶ声をあげた、その生家のご主人です。

渡　辺　皆様こんばんは。水橋の渡辺です。明教院さまの二百回忌にお招きあずかり、この上ないしあわせです。

司　会　渡辺さんのお宅へは門徒のみなさんとよくおまいりさせていただくんですが、大きなお家ですねえ。市江村の旧家という感じなんですが、明教院を語るものは現在のこっていますか？

渡　辺　過去帖に十一歳のとき道ばたで遊んでいたら、上市明光寺のお寺さんに見込まれて剃髪したとあります。父などに聞きますと三歳のころからお経を覚え、近くの寺のお座へゆくと、説教を全部暗しょうしてしまったといわれます。

司　会　享保八年、お生まれになってから十年間、この渡辺さんの

人・時

三男、与三吉という名ですごされるんですが、このあたりをちょっと耳にされた山本佛骨和上が、ふーむとうなずかれた。

山　本　ええ、江戸時代にねえ、名字があったということは、お百姓さんといっても、相当な家だったんだろうと思いましてねえ。

司　会　なるほど。さて、十一歳になった与三吉さん、上市の霊潭師に見出される。さあ、ここからは、上市・明光寺の土井了宗先生にお

うかがいしなければ…。

土　井　はい、諸説はありますがともかく十一歳のとき霊潭師に見い出されて、私の寺においでになったんです。で名は与三吉から霊観と改められた。勉強されたようですが、霊潭師には、自分の子供が三人あって、その他に四人の養子を育てておられる。いずれも見込みがあるということだったんでしょうが、いまの山本和上のおことばで、ふと思いついたんですがこの当時に前後して、四人の学僧が越中から出ますが、みんなが

所を得て

在家出身で、それもみんな名字のある家の人ばかりだったようです。

ともあれ、わが子も養子もわけへだてなく、年令順に机をならべてちょうど十年間勉強されました。伝えられるところによりますと、非常に勉強が好きで、ともかくヒマさえあれば本を読んでおられたようです。で、たまに実家の渡辺さんのところへ帰ることもあったようですが、一度も泊られたことがなかったようです。勉強が好きだったんでしょうねえ。

その霊観師が二十一歳のとき、この善巧寺に入寺されたわけです。

司　会　ようやく、与三吉さんが霊観さんになりました。そして、この寺へこられました。でも、どうしてこられたんですか？

土　井　はっきりしないんですがこちらの十代目の慶翁師にお子さんがあったが、なくなられたようですね。それでこられたようです。

司　会　なるほど。で、この寺へ入られ、さらに京都で勉強ということになるんですが、その間、この霊観さんをジーっとみていた人がいます。門徒の方たちです。今度養子でこられた坊さんはエライ人じゃそうな…ということでしょうな。で、どうしてそれがわかるかと申しますと、今だにこの寺には当時の伝説が残っているんです。聞いてみましょう。本波貫一さん。

本　波　あの、あんたね。わたしが先祖から聞いた話ですけどね。明教院さまってえらいお方じゃと。ほしてあんたね。この寺へ入られたら、大きなイチョウあるでしょ。あれにむかし、たくさん実が成っ

与三吉少年から霊観さんへ

イチョウの伝説は何を語る…

たもんですと。そいでまあそりゃけっこうじゃれど、子供が毎朝きて、お前よけ拾った、わしゃ少ないうてケンカがはじまったそうです。そいで明教院さまがある日、イチョウに向かって、イチョウよイチョウよ、子供がケンカしてどもならんので、ギンナン成ってくれるなって、明教院さん頼まっしゃったら、ハイハイってそれからこのイチョウは実が成らんようになりました。わたしはこの寺のお世話してからずいぶんたちますけど、一つぶも成りません。

司会　なるほど。ところで、イチョウの実が成らんようになったというのはウソかマコトか…こちらに植物学にも通じている利井興弘校長がおられますのでうかがってみましょう。

利井　雌雄異種ですからねえ、なるイチョウはなるし、ならんイチョウははじめからなりません。

司会　でも、突然変異かなんかってことも考えられませんか。

利井　考えられません。

司会　いや、そういうことだと思うんですが、それをそのままいいますとね、こんど来た若ハン、あいそもないって、評判わるいんです。（場内笑い）でも、ありがたいですね。明教院の業績をなんとかわが子に伝えようとして、むずかしい行信論を口にすることもできないし、とにかくえらい人だったということを、こんなかたちで語りついでいったんですねえ。

どうなんでしょう宮崎清先生、いろんなえらい人に伝説はつきものだと思うんですが…

宮崎　伝説の多い人といえば、一に弘法大師でしょう。次に行基菩薩も多い。わが親鸞聖人は多くはないんですが、越後の方にまいりますと、七不思議というのがあります。私、学生時代にむこうの方にいたんですが、新潟医大の学生が、こんなことをいうんです。親鸞聖人の教えはすばらしいんだがどうもこの七不思議なんてのがあるのでどうもいやな気がする、というんです。近代的な教育をうけている我々にはどうも納得できないんだがどうだと聞かれまして、私はその時にこう答えたんです。まあ当時の人たちが、何か自分達で解決のつかないものに出くわすとすべて素朴な気持ちで親鸞聖人に結びつけていったという、そういう信仰態度というのはありがたいと思う。と答えたんですが、いまのギンナンの話もそういうふうにうけとればどうだろうかと思います。でもまあ、浄土真宗には不思議というのは、仏智の不思議以外にはないと私はいただいております。ですから、その他の不思議があるというのは真宗的でないと思うんですが、いかがでございましょうか。

司会　ありがとうございました。それではこのあたりで、その明教院がどれほどえらい方だったのか、門徒衆の伝説とはちがった面を、学者の方々におうかがいしてみたいと思います。山本和上、どうぞ。

山本　ええ、明教院和上の時代には、ずいぶん学問が発達したんですが、私、こういう話を聞いております。当時三業惑乱という。

これはまあ、本願寺として前代未聞の紛争でありました。大勢の学者がこれについて大へんご苦労なさったんですが、それについてある書物に出ているのは、当時、能化職というのが一人でありまして、まあ、みんな、なりたかったんでしょう。で、義教和上が能化職につかれたんですが、もし、あのとき、全部の人望があった僧鎔師が能化職になっておられたら、三業惑乱というのは起こらなかったであろう。というんですね。それは、僧鎔師がりっぱな方だったからだと思うんですが、その僧鎔師は権力というものには傾かず、学問一すじのお方だったということをしみじみと感じるのであります。

司会　当時の学林のようすなどについて、利井校長、いかがですか。

利井　はい。私、じつは子供のころから明教院という方をよく知っているんです。ともうしますのは、私のじいさんで、鮮妙という勧学がおりました。この鮮妙は学生を何千人も育てた人なんですが、いつも鮮妙に弟子は一人もいない。私の育てたのは全部明教院の弟子である。といっていました。空華の流れを汲んで明教院の学問を大切に守り抜いてきたんですね。ですからいまでも、行信教校では入舎式の時は、僧鎔師の「僧約」という学則をいまだに読んでいる。学生諸君も、二百年前と同じように黄袈裟をかけて、問うていわくとやっている。

まあ、そういうことでありますから、二番目のむすこの縁談でも富山と聞いて、こらいかんと思っていましたが、雪山さんと聞いてああ、あの明教院の…というわけで、まあ、これは本家に帰るようなもんだ、むすこがだめならわたしがいきたいぐらいだと思いましてね―（爆笑）まあ、こういうご因縁がありまして、私の学校も百二年つづいておりますが、これみな僧鎔師の学徳のおかげであろうとよろこんでおります。（続く）

三法要理事会 3月20日 納会

春秋の法要決算を報告

三法要理事会の納会が三月二十日開かれ、五十七年春秋の大法要の決算報告がありました。これによると収入は一六三一万八三九五円で、支出は一七七八万七七五一円。当初、大幅な赤字が予想されていましたが、一四六万九三五四円という、一般寺費会計内で返済可能な額に押さえることができてホッとひと息。法要の成功と、六年間の事業計画の成果を喜び合いました。

この日の会合は、三法要理事会ならびに実行委員会の納めの総会とあって、各地区代表三十余名が万障繰り合わせての出席。定刻午前十時。住職から六年間の労をねぎらうあいさつがあったあと、注目の五十七年度三法要特別会計の決算報告が一時間半にわたって行われました。

まず、収入面では—

①前年度から法要準備金として繰り越された七〇〇万二三八七円。

②春の法要当日、参拝者より受納した懇志、三七〇万八五〇〇円。

③秋の法要当日、参拝者より受納した懇志、四二三万七四二五円。

④今年度一般会計から一〇〇万円。

⑤雑収入　三七万八三円。

合わせて一六三一万八三九五円と、当初の見込み一二五〇万を大きく上回わりました。

一方、支出面を春、秋の法要と分けてみると—

六年間の成果を評価

〔春の法要〕

①荘厳費。これは当日の花、供物、ローソク、香等の費用で、四一万八五四〇円。

②法礼。本山、講師、法中、楽人の方々へのお礼に二四三万六七八〇円。

③記念事業費。春は花のパネルと園遊会に、六六万八五一〇円。

④記念品。門徒へ焼香盆、いはいへ聖典入れ、法中に二連珠等、一〇三万六二〇〇円。

⑤記録費。ビデオ、録音テープ、写真等に、四四万三五〇〇円。

⑥総務費　寺報発行、接待、会合費等に、一九二万一〇〇〇円。

⑦事務費　案内、コピー等に一二万七九〇〇円。

⑧雑費　人件費等に、一四万六六〇〇円。

以上で、春の法要の支出合計は七一九万九〇三〇円。

〔秋の法要〕

①荘厳費、当日の花、供物、ローソク、香等に、五八万五二七〇円。

②法礼。本山、講師、法中、楽人の方々へのお礼で、四六八万三八五〇円。

③記念事業。秋は空華僧鎔展と菊花展を開催、その準備、印刷費等に、七六万五七五〇円。

④記念品。門信徒に香炉と香合。法中に中啓入れなど、一七五万九五五〇円。

⑤記録。ビデオ、録音テープ、写真等に、五四万二二七〇円。

⑥総務　接待、弁当、会合費等に二〇〇万九〇〇円。

⑦事務費。案内、コピー等に九万二一三一円。

⑧雑費、人件費を含めて一五万九〇〇〇円。

以上で、秋の法要の支出合計は一〇五八万八七二一円。

春と秋の支出を合わせると——一七七八万七七五一円にのぼります。で、五十七年度の収入総額からこの支出を差引きすると——一四六万九三五四円の赤字ということになりました。

理事会では、当初、五〇〇万近い赤字が出るのでは、という暗い見通しもあったのですが、法要の重要性を鑑みて、赤字覚悟で事業を進めてきました。ところが、門信徒の方々の当日懇志が予想を大きく上回ったおかげで、赤字は最少限にとどまり、この返済については、今後の報恩講廻りなどで門徒の方へ負担をかけることなく、一般会計の予備費から補てんして来年度中にすませる見込みがたち、「一時はどうなるかと心配だった」という理事会メンバーも、ホッと胸をなでおろしたことであります。

三法要 七年の歩み

五十一年

▽法要気運高まり、各地で説明会

▽募財は寺費の五倍で六年計画

▽寺に乗用車購入。門徒廻りスムーズに

五十二年

▽1月1日　寺報「善巧」第一号

▽3月16日　三法要事務所スタート

護法愛山を柱に意欲あふれる審議

▽3月27日　三法要建設委員会、寺の建築関係の現状を視察。雪害修理を手掛ける。

▽5月1日　第一回「花の初参り」

▽7月24日　うらやま日曜学校開校

▽7月29日　夏の夜の一泊聞法

▽8月15日　こども盆踊り大会

▽寺の教化活動はこの年つぎつぎとスタート。一方、建設事業として、門徒集会所ならびに空華殿の建設が本決まり

五十三年

▽3月11日、太子会法要が営まれ、このあと門徒の建設関係者で新築

「教化推進協議会」誕生

三法要実行委員会を衣替え

寺院活動の推進力に

寺の器と心の器を―と、六年前にスタートした三法要理事会も、この三月二十日の総会をもって、その大役を果たして解散ということになりましたが、この六年の活躍にはめざましいものがあり、今後も寺の活動の原動力として、名前も新たに「教化推進協議会」と改めて、再スタートしていただくことになりました。

この教化推進協議会は略して、教推協といいますが、本山の指導に基づく新しい組織で、これまでの寺院活動はほとんどが総代会によって動かされていましたが、教化活動は、実際の教化組織、例えば婦人会、お経会などのお世話方に中心になってもらわねばなりません。そこで、寺の教化組織―善巧寺の場合は、白鵠会、若婦人会、お経会、夢を語る会、日曜学校、雪ん子劇団、お講世話方などの皆さんを中心に、教推協を組織し、年間の寺の教化活動を協議、検討してさらにそれを推進していただこうというものです。

善巧寺では、これまで三法要実行委員会がこの教推協の役割りを果たしてきました。総代さんと世話方が一体となっての実行委は、文字通り実行力があり、三法要では年間二十数回の会合を開いて、法要の推進に努力して下さいました。そうしたことから、新年度からは、この実行委を教推協と改めて、メンバーをさらに充実させて再スタートすることにしたものです。

さよなら三法要の印

57年度三法要特別会計決算報告

収入

①	前年度繰越金	7,002,387
②	春の法要懇志	3,708,500
③	秋の法要懇志	4,237,425
④	今年度一般寺費	1,000,000
⑤	雑収入	370,083
		16,318,395

支出

春の法要

①	荘厳	418,540
②	法礼	2,436,780
③	記念事業	668,510
④	記念品	1,036,200
⑤	記録	443,500
⑥	総務	1,921,000
⑦	事務	127,900
⑧	雑費	146,600
		7,199,030

秋の法要

①	荘厳	585,270
②	法礼	4,683,850
③	記念事業	765,750
④	記念品	1,759,550
⑤	記録	542,270
⑥	総務	2,000,900
⑦	事務	92,131
⑧	雑費	159,000
		10,588,721

収入－支出　16,318,395－17,787,751＝　差引 －1,469,354

五十四年

▽2月　うらやまお経会発足
▽4月　若婦人会別名「日本一おいしいお菓子を食べる会」発会
▽6月　夢を語る会　活躍
▽7月　集会所の御内仏完成
▽12月　ことばの教室「雪ん子劇団」発足、一躍県内のアイドルに

五十五年

▽6月～7月　本堂改築工事
▽8月19日　三法要を春秋二回に勤修することを決定
▽10月19日　三法要推進委発足

五十六年

▽3月20日　三法要理事会
▽7月　内陣金柱完成
▽10月19日　巻障子修復完成　三法要実行委員会発足。
▽境内整備、経蔵移転、車庫建設本堂内装…と急ピッチ

五十七年

▽前卓、五具足、四具足、みす、お戸帳、幔幕、式幕、余間ふすま余間折戸、華ろう、銅羅、御文章箱、御伝鈔箱、仏旗、掲示板、山号額、寺号石柱等々、ご寄進により新調
▽慶びの春＝4月29日　ご門主を迎えて親鸞聖人ご誕生八百年慶讃法要を勤修
▽聞法の秋＝11月3・4・5日、宗祖七百回忌、明教院僧鎔師二百回忌、寺族門徒総法要、落慶法要を、前門主を迎えて勤修
工事の入札。4月より着工
▽4月1日　特別懇志、内陣法名の制度が開設
▽6月10日　第一回「野休み落語会」
▽10月20日　前住職三十三回忌、同日第一期建設事業完成

住職の大学教授退官記念パーティー

4月2日

めぐる盃

前住職、博士のごえはんが博士にならっしゃったときや、チョーチン行列したもんじゃ、というハナシ。なら、いまのごえはんが大学教授をやめっしゃるのをご縁にして、祝いのパーティー開いてもよかろうわい――というわけで四月二日、宇奈月のホテルニューオータニで〝めぐる縁、めぐる盃〟の宴が催されました。ようこそようこそ県内外から、ユーメイな方々がデカイとこられて、にぎやかで、心温まるパーティーでありました。

旧制高校の同級生

九州からかけつけた、**武冨敏治さん**「雪山とは古いつき合いで、福岡高等学校の同級生です。卒業は僕の方が一年早く、雪山と檀一雄は一年遅れた。しかし頭脳は抜群で、京都大学では私は雪山にドイツ語をたすけてもらって、やっと卒業できたようなものです。案内をもらってなにはともあれ、福岡からかけつけました。「雪山！おめでとう」

神田七次郎氏

県教育委員会の同級生、神田七次郎さん、「二十五年も前ですか県の任命教育委員第一号として一緒させていただきました。雪山さんは学者様、私は麻の仕事をしている商売人、両極端ではありますが、年も同い年。相通じるものがありました。私はまだ現役ですが雪山さんは退官。しかしまわりには学者や門徒さんがいらっしゃるので、これからも楽しいことでしょう。うらやましいかぎり。」

門徒総代、橋場啓次さん

「八十歳を越えた善巧寺の門徒です。こうして元気なのもみ仏のおかげ。ごんげはん、おめでとう。これからも命あるかぎり寺のためにつくします」

――と、ご祝辞をいただいたあと住職が黒のスーツであいさつ。

住職　「めぐる縁、めぐる盃、退官す。は私の住職日記の俳句、でありますが、いま、私は七十二歳。めぐる盃ではなくて、めぐるイノシシ七回目であります。戦前戦中戦後…シュトウルムウントドランク〝疾風怒涛〟の時代の生き残りでございます。こんなパーティーに、こんなにたくさん、まごころの結集で来て下さるとは思いもよりませんでした。で、博多弁でいまの私の気持ちを申しますと、〝アタキャークサ、チャーカチューシテ、ホンノコツ、ドゲンモコゲンモ、ナラントタイ〟であります。」

――ゲーテ協会、奥貫晴弘先生の音頭で、ドイツ語で〝プロージット　ユキヤマ！〟と乾杯。

このあと〝人に歴史あり〟というわけで、住職の○歳から七十二歳までをご紹介、その折々に、ご祝辞をいただきました。

「おんちゃん！　わたしは兄俊之のことをこういってました。よくおもりをしてくれて、かわいがってくれました。おんちゃん、みなさんにこんなにしてもらって、よかったねー、おめでとう！」――住職の妹、ミヲコさん

「私はバンカラだったが、雪山は上品なおぼっちゃん、雪のように白く、神々しかったヨ、ハハハ」――と旧制高等学校同級生で東京からかけつけた中田敏郎さん。

「よーし、やろう！」――と、同じく同級生で芦屋から来て下さった飯野英三郎さん、同級生とはりきって応援歌。〝ああ　玄海の波の華〟、を高らかに。この日まで出席の予定だった、檀一雄夫人、ヨソ子さんは、尾崎一雄氏の葬儀のために残念ながら欠席。

「私たち門徒にとって、寺の住職というのは、おやじと同じなのです。前住職がなくなられて、さあ、京都におられるいまのごえはんに、どうしても帰ってきてほしかった。で、みんなでたのんだところ、中央を捨てて、このいなかに帰ってきて下さった。たいへんな決断だったと思うんです。いやあ、わたしたちにとってこんなにうれしいことはなかった。で、いま、正直いって、そのごえはんが大学の先生をしておられたことを知らない門徒もたくさんいます。これは軽んじていうのでなく、それほど、門徒に一つも迷わくかけず、両方を上手に全うせられたのだと思います。退官ということは私たちのもとへ本当に帰ってこられたということ。どうか、これからはゆっくりヒザをまじえて話し合いませんか。ごえはん！」――総代の鬼原勝次さん。

「京都から帰ってこられた先生が、古い前の寺の庫裡で、よく、文化講座を催されました。世界観喪失の時代に、労働組合の問題とか、財閥解体などについて的確なお話をうかがうことができました。ところで、この地方には〝ところのごんげはん〟ということばがあります。近い住職の値打ちはわからんということですが、今日はこうしていろんな先生方が全国から集まってこられ、わがごんげはんは、りっぱな、有名な先生であるということをみんなで知ることができました。」

――町教育長　中村慶一さん。

めぐる縁

「ぼくは、雪山さんと不思議なご縁で、あなたの寺の明教院僧鎔さまというエライ方の讃歌を作曲させてもらったことがある。ひあーあ、明教院、僧鎔さまーというの。覚えていて下さる方もおられてうれしいですね。そして、きょうはまあ、なんともうらやましいかぎり。おめでとう、おめでとう」――富山大学名誉教授　黒坂富治先生。

「昭和三十四年にはからずも県教委から表彰をうけまして。その時、賞状をいただいたのが雪山先生からでした。そして女子短大でめぐり会って、今度、ご一緒にあのなつかしい学校を退官することができましたことを心から喜んでおります」――女子短大を今年一緒に退官された、画家の東一雄先生。

「先生はスリッパをパタパタいわせて教室に入ってこられます。あ、雪山先生だ。哲学の授業です。お家のことや奥さんのこと、身近なお話をして下さるんですが、時間がたつにつれてだんだんねむくなるんです。スミマセンでした」――雪山教授の哲学の講義をうけた短大生　谷川万由美さん。

「北日本文学賞というものを私が文化部長のときにつくりまして、その選考委員に先生になっていただきました。文学に対する確かな目をお持ちなのに敬服しました。お体もよくなられたようなので、もう一度お願いしようかと思っています」――北日本新聞　兼久文治さん。

「黒部ロータリー発足当時の初代会長が雪山先生です。以来十年、卓話で哲学の話をよくうかがい非常に啓蒙されました。退官してふけないよう、小ユビの方もガンバッテ下さい」――黒部ロータリーの米沢幸明さん。そして三十人の出席メンバーを代表して有倉久会長から花束をいただきました。

「富山市教委で五年前から市民大学をはじめ、ずっと先生に講師をお願いしています。先ほど門徒の方が、先生が大学の先生とは知らなかったものもいると申されましたが、私は逆に、先生がまさか寺の住職さんとは知りませんでした。日本浪漫派のお話を目を輝かせて話される先生、市民大学には停年はありません。これからも末永く、よろしくおねがいします」――富山市民大学の伊藤了一さん。

「ぼくのおじいちゃん、これからも仲良く」「ぼくのおじいちゃん、これからも遊んでね」ーと、孫のメッセージ。そして最後は、おじいちゃま　バンザイ！雪山君、雪山先生、ごえはんバンザーイ！

住職日記

昭和五十八年三月五日　土曜　晴

何時降ったのか、屋根が又真白だ。先日の暖気で殆んど消えていた庭が、再び雪景色。このような一進一退で、何とか春に向うのだろう。

三日市から上ゲ法事、五人。音沢から引越して十年になると言う。亡母十三回忌法要なり。書斎に引籠る。明るい日射しが庭一杯にさしこんで、羅漢樹の雪も融け初めている。

「寺報 善巧」に、此の住職日記を掲載し初めてから既に七年。今回が二十六回目に当る。ひょんな事から、小生の退官記念パーティーを開くこととなり、此の二十六回分の日記を一冊に編むようにとの息子からの懇懇黙しがたく、午前中は、このことにかかり切りとなる。

思えば、小生、俳句なるものを作り初めて五十年になる。当時、京都の平安中学で教鞭をとっていた時、同好の士と、週一回土曜日に、毎回吟行を続けた思い出がある。ホトトギス投稿者の一人として、多少名が知られ、句集も出していた浜中柑児師匠が同僚のリーダーで、私など、文字通り驥尾に付いての道楽半分だったのが、兎に角此の日記にも毎回二句宛ひねり出せるのも、当時の句ごころが多少でも残っているお蔭なのだろう。今回は、四月二日のパーティーを頭に置いての句を作らねばならない。

パーティーといえば、息子の発意に乗ったのがきっかけで、案内状のリストを作って見て気づいたのだが、七十年以上も生きて来ると、実に色々な関わり合いを結んで来たことに気付く。書斎の人と自覚している小生にして此の様な次第。現代日本社会の多様化、昏迷化の象徴の一つか。

机の上の盆栽の春蘭が、頭をもたげかけている。たしか、庭の春蘭を詠んだ句を寺報にのせた記憶があるが、鉢植えのは六年前、裏のお医者から頂いたもの。丁度、小生と同じく病に仆れて、病後のリハビリテーションを兼ねての裏山への毎日の散歩の際、採集されたものである。三つの花芽の成長を、三カ月も以前から楽しみにしていたのが、その中の一つが、紫の斑点の花弁の姿を、半ば現わしている。

午後から快晴。ヘリコプターが舞っている。入浴、就床八時。

めぐる縁　めぐる盃
退官す
退いて　自在の天地
高志の春

雪ん子 ワッショイ春の公演

「こどものまつりだ」「そーれ、ワッショイ！ワッショイ！」――ことばの教室「雪ん子劇団」の春の公演が三月二十六日、宇奈月町中央公民館で行われました。

今回の出し物は、北島春信作、芥川也寸志作曲の「こどものまつり」というミュージカル劇。雪ん子にとっては久々の新作とあって昨年末からみっちりとけい古を重ねて、公演にのぞみました。

舞台は、たたみ四十畳の大カーテンのバックに、紅白のチョウチン二十数個を配し、中央には寺の大だいこが置かれ、歌あり踊ありの大絵巻。

総勢三十四人がハッピやユニホームなどの衣裳をつけて舞台せましと熱演し、最後は本みこし、花みこし、たるみこし、ロケットみこしがドッとくり出して、あつまった二百数十人の観客を圧倒しました。

このミュージカルは、置県百年の記念行事や新世紀博に出演が予定されており、この一年、県内外で大いに話題をふりまくことになりそうです。

御助成会勤まる

3月15・16日

ごしょさま、おかみお講などと呼ばれる下三日講の本山御助成会が、三月十五、十六の両日、善巧寺でつとまりました。組内法中の読経のあと、本如上人のご消息を拝聴。浦田秀栄師の法話を聴聞しました。

なお、初日には富山本願寺の平野輪番がお越しになり、来年五月に行われる「別院開創百周年」の慶讃法要に積極参加いただきたい、との呼びかけがありました。同法要は来年五月、両門様をお迎えして、別院でつとめられます。

募財は下三日講の世話方扱いで今年度中に行われるもようです。

うらやま日校終了式

うらやま日曜学校の終了式が四月一日行われ、十三人の終了生を送りました。この子たちが一年生のときに日校が開校したこともあって、感慨もひとしお。どうか思いやりのあるステキな中学生になって下さい。

続 お茶の間説法できました

「お茶の間説法」が、また、本になり、この四月中に京都の百華園から発売されます。

今回は、昨年春からサンケイ新聞婦人面に連載中の「お茶の間説法」と、七年前に同紙に連載したコラム「さろん・ど・説法、あいうえお」を合わせたものです。

気軽に読めて、けっこうおもしろいので、是非、あなたも一冊、といわず、何冊でも買って下さい。

前回の「お茶の間説法」もこの機会に三版目を出すそうです。合わせて、どうぞ。

六輔七転八倒うらやま野休み落語会

おなじみの六輔七転八倒・野休み落語会、今年は六月五日の日曜日、午後七時半の開演です。

出演は〝座長〟の永六輔さんと入船亭扇橋師匠、柳家小三治師匠のビッグ・スリー。さらに今回のおひざがわりは、大かぐら、鏡味仙寿郎師匠。そしてもう一人。二年前に前座でやってきた小はぜさん。今年はリッパに二ッ目、柳家はん治と改めてご気嫌をうかがいます。

寺の本堂で落語を聞くしあわせを、十分に味わって下さいませ。

なお、お代は例によって、オモシロ代のザル回し、よろしくよろしく…

宇奈月夢を語る会

六月五日(日)午後七時半善巧寺で開演

合掌

この冬、南の島スリランカへ仏跡参拝の旅に出かけてきました。二千数百年、おしゃか様の教えが脈々と息づいている姿は、じつに美しく、感動的でありました。

ところで、そのスリランカで、私が教えられたのは、なんと、日本語の使い方でありました。

アーナンダという仏弟子と同じ名のガイドさんがこういうんです。

「皆サン、スリランカハ、ミドリ多イデス。アレハ、ヤシノ林デス。ワタシタチハ、アノ、ヤシノ木カラ、ヤシノ実ヲモラッテ、飲ミ物ニシタリ、ココナッツクリマス。コチラノゴムノ木カラハ、皮ニ傷ツケテ樹液ヲモライマス。ソレデ、ゴムヲツクリマス」

ヤシの木から実をもらう。ゴムの木から樹液をもらう。そうなんですね。私たち、みんなもらって生きてる。命は親にもらい、親という名は子にもらい…。そう、もうすぐ田植えですけど、米は種モミの命をもらうんだってこと、忘れてしまっていたんじゃないかしら。